

アートとしてのダイナミズムと同時性  
—未来派が目指したもの—

Dynamism and Simultaneity as Art  
—What Futurism had aimed for—

小谷内 郁宏  
Ikuhiro KOYAUCHI

(令和元年 10 月 1 日受理)

Keyword: 未来派 モダンアート ベルグソン 第一次世界大戦 ファシズム

1909 年 2 月 20 日、フランスの著名な日刊紙ル・フィガロ (Le Figaro: 1826 年創刊) の紙面に大きく「未来派創立宣言」(仏: Manifeste du futurisme) が掲載された。著者は、イタリアの詩人フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ<sup>(1)</sup>であった。タイトルにはマルクスの共産党宣言に倣って「宣言」という語が使用され、未来派運動はこの宣言文の発表をもって始まったとされる。そして一か月も経たず、日本では 3 月 12 日に発刊された文芸誌『スバル』において、宣言の一部が翻訳掲載されたが、その紹介者は明治の文豪森鴎外であった。すなわち明治後期という当時の日本でも欧米の先進的芸術運動に鋭敏に反応しながら、グローバルな視点を持ち、日本の文芸思潮に取り入れようとしていた人々がいたことは、この運動の世界的な影響力が窺い知れる。この論考では、未来派の先駆者たちが理念とし、制作のモチーフとしたものが、時代背景としての産業工業社会に内在する「ダイナミズム」であり、「同時性」であり、「スピード」であったことを示したい。そして宣言文を多様なメディアから発信し、同志と共にグループ活動をしていくスタイルは、後に隣国のスイスのダダイズムやフランスのシュルレアリスム運動に少なからず影響を与えたことを論述したいと考える。

## 1. はじめに

1914 年の第一次世界大戦の開戦、そして世界で初めての社会主義国が誕生することになった 1917 年のロシア革命という世界史的大事件の勃発前、フランスの新聞紙上において、一人のイタリア詩人がエネルギーの喜び、科学技術の美を歌い上げる異例の宣言が掲載された。その掲載はヨーロッパのみならず、世界の同時代の読者に大きな衝撃を与え、それ以後に続く芸術領域に大きな影響を与えた。そして、その時点から「未来派」が誕生したと言われている。

19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、フランスにおいては「印象派」「キュビズム」「フォービズム」といった産業革命以後の社会を反映した絵画運動があった。しかしながら、そういった「静かな」改革が存在した一方、新聞というメディアを利用し、実作品公開以前にアジテーションで自らの作品制作の意図を強く打ち出す集団は存在しなかった。その集

団の意図は、絵画に始まり、彫刻、音楽、演劇、文学、ファッション、建築といった多様な分野を横断し、共有された。パントマイムと挑発の演劇、騒音の音楽、破壊された統辞法の詩、女性の欲望の解放、精神と行動の状態を反映した絵画といった、現在にも続くモダンアートの問題の核心がいち早く宣言文に盛り込まれていた。

未来派の標榜する「未来主義」は、ヨーロッパのモダンアート・シーンに対する 20 世紀以後の最も早い貢献であり、最も強い衝撃のひとつでもあったと今日では再評価されている。その運動は、19 世紀以前の自然主義、伝統主義への反動という側面を抱えつつ、急進的、動的、未来志向的なものでもあった。さらに、マリネッティはその宣言の中で、都市の生活、生活の速さ、車、飛行機の優位性を謳った。



図 1 未来派の創立メンバー

一方、未来派は創立当初から独自の政治的意図を宣言文の中に盛り込んできた。すなわち、国家主義的、反聖職主義的、反伝統主義といったものである。1913 年 10 月、マリネッティ、ボッチョーニ、カッラ、ルッソロの署名がされた「未来派政治綱領」が雑誌誌上に公表された。内容は、国家主義的、反平和主義的動機の色が濃く、軍隊の強化、プロレタリアート（労働者）の擁護、領土拡張主義と汎イタリア主義、反聖職主義と汎社会主義、そして進歩信仰であった。1914 年以降、第一次世界大戦開戦時には参戦論立場を取り、メンバーの大半が政治寄りの姿勢を強めていった。1915 年には、マリネッティが社会主義からの転向組であるムッソリーニと出会うこととなり、以後両者は紆余曲折を経ながら関係を深めていくことになった。そういった時点で、未来派は芸術集団かつ政治的集団となり、ムッソリーニ、ファシズムの運命とともに消え入る運命を背負うことになってしまったのである。

いかなる理由で、マリネッティは未来派宣言を最初にイタリアではなく、フランスの新聞に掲載したのか。それは当時のヨーロッパにおいて、文化的に最も進んだ国はフランスであり、その次にドイツであり、イギリスであったからである。20 世紀初頭のイタリアは、15～16 世紀においてはダ・ヴィンチやラファエロに代表されるイタリア・ルネッサンス期の黄金時代があったにせよ、旧態依然とした伝統文化を引きずり、進歩のない国と見做されていた。マリネッティも広報効果も考慮した上で、まずはフランスから発信したと言われている。

実は、イタリアはヨーロッパにおいて統一が比較的遅れた国である。中世以降、イタリアは小国に分裂し、それぞれの国家は隣国のオーストリア、フランス、スペインを後ろ盾にし、権力闘争を続けていた。19 世紀の初頭、イタリアは他の欧州諸国と同様、ナポレオンの支配下に入り、諸改革が行われたが、ナポレオン没落後はオーストリア帝国の影響下で旧体制が復活し、それに反発する勢力によりイタリアの統一と封建制度打倒が目指されたのである。

結局、イタリア王国が建国され、一応の統一がされたのは 1861 年のことであった。その後、1866 年にヴェネツィア、1870 年にローマなどの教皇領が併合され半島の統一は終

了したが、未回収地が残り、最終的な回収が終わったのは第一次世界大戦（1914-1918）が終わり、イタリアが戦勝国になった後のことであった。ゆえに、マリネッティの宣言公布は最終的なイタリア統一以前のことだったのである。

従来、モダンアートの集団的先駆的芸術運動としては、「ダダイズム」「シュルレアリスム」といった 20 世紀初頭のムーブメントを指すことが慣例であったが、現在ではイタリア未来派こそが直接的かつ意図的に集団に訴えかけた 20 世紀最初の運動であったということが通説となっている。

未来派のメンバーたちが目指したもの、それは重くのしかかる過去との決別、そしていやが上にも迫りくる近代文明に対応する新しい芸術の創造であったのである。

## 2. 未来派宣言集

1909 年 2 月、マリネッティは最初に「未来派創立宣言」は公表したが、その反響の大きさに驚きつつそれに気を良くしてか、その後矢継ぎ早に仲間たちと共に様々な宣言文を新聞紙上、雑誌誌上に公表を続けていくことになった。以下に、その名称と発表日付を列挙する。

- |                               |                  |
|-------------------------------|------------------|
| 1. 「未来派創立宣言」                  | 1909 年 2 月 20 日  |
| 署名：マリネッティ                     | 内容：主義方針          |
| 2. 「未来派画家宣言」                  | 1910 年 2 月 11 日  |
| 署名：ボッチョーニ、カッラ、ルッソロ、バッラ、セヴェリーニ | 内容：絵画            |
| 3. 「未来派絵画技術宣言」                | 1910 年 4 月 11 日  |
| 署名：ボッチョーニ、カッラ、ルッソロ、バッラ、セヴェリーニ | 内容：絵画            |
| 4. 「未来派音楽家宣言」                 | 1910 年 10 月 11 日 |
| 署名：ブラテッラ                      | 内容：音楽            |
| 5. 「未来派ドラマツルギー宣言」             | 1911 年 1 月 11 日  |
| 署名：マリネッティ                     | 内容：演劇            |
| 6. 「未来派音楽宣言」第 2 版             | 1911 年 1 月 11 日  |
| 署名：ブラテッラ                      | 内容：音楽            |
| 7. 「未来派音楽技術宣言」                | 1911 年 3 月 29 日  |
| 署名：ブラテッラ                      | 内容：音楽            |
| 8. 「未来派彫刻技術宣言」                | 1912 年 4 月 11 日  |
| 署名：ボッチョーニ                     | 内容：彫刻            |
| 9. 「未来派女性宣言」                  | 1912 年 3 月 25 日  |
| 署名：ド・サン＝ボン                    | 内容：ファッション        |
| 10. 「未来派文学技術宣言」               | 1912 年 5 月 11 日  |
| 署名：マリネッティ                     | 内容：文学            |
| 11. 「未来派建築宣言」                 | 1914 年 7 月 11 日  |
| 署名：アントニオ・サンテリア                | 内容：建築            |

1909 年から 1912 までの 4 年間にわたる主な宣言文であるが、20 年代に至っても宣言文を継続して公表し続けた。

その中で、やはり第一回目に公表した「未来派創立宣言」が、取り分け時代背景的にもエポックメイキングな宣言文であり、内容的にも斬新かつ衝撃的なものだったと言える。未来派のルーツを探る上でも、ここで主な内容をまとめていきたい。

首領である詩人マリネッティが起草したものであるが、前半は散文詩で未来派の理想を謳い、後半において以下の未来派宣言 11 か条を謳っている。

1. われわれは、危険への愛と、活力と無謀の習性をうたいたい。
2. 勇気、大胆、反乱がわれわれの詩の本質的な要素となるだろう。
3. 文学は今日まで沈思黙考、恍惚感、眠りを賞揚してきた。われわれは攻撃的な運動、熱を帯びた不眠、かけ足、宙返り、びんた、げんこつを賞揚したい。
4. 世界の偉大さは、ある新しい美によって豊かになったとわれわれは断言しよう。それは速度の美である。(中略) うなりをあげる自動車は、《サモトラケのニケ》よりも美しい。
5. われわれはハンドルを握る男を賞揚したい。(後略)
6. 詩人は、情熱をもって、華麗に、また気前よく、力のかぎりをつくして始原的な要素の熱狂を増大させなくてはならない。
7. 闘争のなかにしか、もはや美はない。攻撃的な性格をもたない作品に傑作はありえない。(後略)
8. (前略) もしわれわれ不可能の神秘の扉を突き破ろうとするなら、なぜ後ろをふりかえるのか？ 時間と空間はきのう死んだ。(後略)
9. われわれは、世界の唯一の健康法である戦争、軍国主義、愛国主義、無政府主義者の破壊的な行動、命を犠牲にできる美しい理想、そして女性蔑視に栄光を与えたい。
10. われわれは、美術館と図書館と各種アカデミーを破壊し、道徳主義と女性賛美主義と、すべての日和見的で功利的な卑屈さと戦いたい。
11. われわれは、労働、娯楽、暴動に揺り動かされる大群衆をうたうだろう。近代的な大都市における革命の多彩で多音声的な潮流をうたうだろう。(後略) <sup>(2)</sup>

1 と 2 と 3 の宣言で、未来派の文学志向が謳われている。マリネッティ自身は、当初、フランスの印象派、象徴主義といった審美的なものから影響を受け出発したが、未来派はそういったものから脱却することから始めたいとしている。

4 と 5 の宣言は、速度の美への賞揚に関わる。当時、列車、飛行機、車とのスピードが以前と比較し、各段に上がった乗り物が出現した時期である。特に、車はレースなどにおいて、速度 200 km に達していたという。4 における「サモトラケのニケ」は、現在ルーブル美術館にある古代ギリシャ時代の彫刻で、自動車の方がそれよりも美しいという表現によって、表現派の新しい美学を謳っている。

6 と 7 と 8 は、イタリアに綿々と続く古代ローマ時代、ルネッサンス期に代表される伝統的文化との決別を表現している。

9 と 10、特に 9 は物議を醸した宣言である。戦争賛美、破壊衝動、女性蔑視を謳ってい



るからである。男性性原理が色濃く、ニーチェ哲学の影響を強く受けていると言われている。後に、ファシズムとの政治的接近を促す要因ともなった思想とも言える。

11 においては、未来派の運動が多分に都会的なスタイルで、大衆誘導型の方法論が使われていたことがわかる。

### 3. ウンベルト・ボッチョーニ

未来派創立当初から活動し、周辺から「未来派のプリンス」とも言われた画家、彫刻家にして理論家でもあった人物がウンベルト・ボッチョーニである。1882 年、ブーツ型のイタリア半島のつま先部分に当たり、その先にシチリア島がひかえるレッジョ・カラブリアで生まれ、1901 年からローマの美術学校に通った。1902 年にはパリに渡り、印象派、ポスト印象派を模倣したという。1907 年ミラノに移住し、詩人のマリネッティ、色彩分離派の画家たちと親交を結んだ。1910 年、今日、未来派の画家として名を残すカルロ・カッラ、ルイージ・ルッソロ、ジャコモ・バッラ、ジノー・セヴェリーニ等と共に、未来派画家宣言、未来派絵画技術宣言を発表した。

彼は、近代の画家はモデルや過去の具象美術の伝統の縛りから自由となり、ダイナミックな同時代と並走すべきと主張した。旺盛な芸術活動に邁進しながら、彼は砲兵連隊に入隊したが、1916 年 8 月 16 日、騎兵隊の訓練中に落馬し、馬に踏みつけられ、翌 17 日に 33 歳の若さで死去した。

#### 3.1 『空間における連続性の唯一の形態』(図 2) について

2019 年 9 月、筆者はミラノ市にあるミラノ 20 世紀美術館を訪れた。その美術館は未来派の作家の作品を多数所蔵していることで有名である。館内に入ると、ウンベルト・ボッチョーニの絵画作品から始まり、その先にはひと際目に付く彫刻作品、未来派彫刻の中でもおそらく最も有名であろう作品が展示されている。それがイタリアの 20 セントユーロ・コインの図柄にもなっている『空間における連続性の唯一の形態』(英訳: Unique Form of Continuity in Space)である。原型は 1913 年に石膏像として制作された。実は、ボッチョーニが存命中には一体もブロンズ像は制作されていない。展示作品は石膏像を鋳型として、1931 年にブロンズ像として制作されたものである。この像は多くの未来派作家たちが制作した彫刻の中でも未来派理論が最も明確に投影されてものとして、現在でも未来派を代表する彫刻作品として挙げられる。



図 2 筆者撮影

ボッチョーニは絵画に続き、3 次元の彫刻作品に未来派の基本的原理を再現しようとした。すなわち、「ダイナミズム Dynamism」と「同時性 Simultaneity」である。ボッチョーニは制作当初より従来の伝統的価値観を示す彫像でもなく、写実的なヌード像ではなく、何よりも「ダイナミズム」を内包する彫像を制作することを目指した。素材として敢えて静態的な観があるブロンズではなく、時間の経過と共にダメージを受けやすい一方、動態

的なイメージを表出しやすい石膏を、彼が選択したのも未来派の主張に合致するものであった。

何故に、この彫像は奇怪な姿をしているのだろうか。この点を説明するためには、未来派の底流にある当時の新思潮としての「ベルグソン<sup>(3)</sup>哲学」の時間論の考え方があることを述べなければならない。

ベルグソンは、世界の真実を知ろうとする時、科学は世界を外側から客観的に見ようとするが、そうではなく、人間みずからの精神や意識そのものに入り込み、内側から見て取れる真実を把握しなければならないとした。この把握の態度においては、「時間」が深く関係しており、人間は過去の記憶に基づき、未来を予想しながら、今この瞬間を生きている。つまりに人間の心、人間の生には時間が土台になっているとしたのである。

ベルグソンは、いわゆる時計の時間―連続している時間を人工的に区切る方法―は本質ではなく、あらゆる時間を「空間的」に捉えたに過ぎないと考えた。人間本来の純粋な時間とは直観でしか捉えられないもので、「持続」、すなわち「いまこの瞬間」という意識の絶え間ない流れとした。例えとして、同じ1時間でもその時の感情によって長くも感じたり、短くも感じたりすることは、誰でも経験することである。ベルグソンは、さらに「自由」とは意識の運動そのものに立ち返ることであると考えた。

ボッチョーニは、ベルグソンの時間観を自らの作品に反映させた。この彫像は、人間の内的な時間を空間化した作品なのである。その証左として、この彫像は人物像としては写実的でない様相を呈している。まるで鎧をかぶっているような体躯、足を大きく前に出して、風を切っていく。体を包む纏わりつく大気、ダイナミズムがまるで甲冑のような形で表現されている。そして、頭、手押しなどそれぞれの部分でダイナミズムが起きており、そのダイナミズムの一瞬が連続的、同時に表現されている像と言えよう。



図3 20 セントユーロ

#### 4. 未来派とファシズム まとめ

マリネッティは、フランス留学を経て、フランスよりも遅れているイタリアの芸術を変革しようと考え、1909年2月に「未来派創立宣言」を公表した。単なる芸術運動ではなく、文化を通して社会をも変革しようとしたのである。近年で言うと、中国における「文化大革命」にも通じる思想運動であり、マリネッティはイタリアを古代ローマ帝国やイタリア・ルネッサンス期の遺産で生きている「情けない国」として捉え、変革の必要性を説いた。

その宣言から5年後、第一次世界大戦が始まり、イタリアは中立宣言をし、参戦を見合わせた。それに対して未来派は参戦すべきであると反対運動を起こした。その後、世論が参戦に傾き、1915年5月に宣戦布告し、フランス、イギリス側に立った。そして未来派のメンバーの一部が志願し、戦闘に参加した。この時期に、未来派メンバーとムッソリーニとの接点が生まれたのである。

1918年11月に大戦は終結したが、イタリアは戦勝国として期待していた領土の割譲を得ることができなかった。これを機にマリネッティは愛国主義者となり、ムッソリーニの

側も、未来派の街頭演説、大衆煽動の手法は自らのファシズム体制確立の手助けになると考えていた。

1919年5月、マリネッティはファシスト集会に参加し、そこでムッソリーニとの共闘を表明した。ムッソリーニは、政権奪取の暁には未来派思想を国家の芸術政策にすると約束を交わし、実際ムッソリーニ体制が成立した後は、未来派は急速に初期の前衛的エネルギーを失い、メンバーたちの離散が相次ぐようになった。

この政治に関わる未来派の一連の推移は、芸術家集団が政治的になり体制に密着すると、本来の芸術運動の真意が忘れ去られ、いずれは崩壊してしまうという実例のひとつになったと言える。

1909年に始まった「未来派」の周辺を図4で見てみると、先陣としてマチスを擁するフォービズム（野生派）とピカソ、ブラックを擁するキュビズム（立体派）があり、ほぼ同時期に平行してあった運動には、ロシアの構成主義、パリに集まっていた若き芸術家グループを指すエコール・ド・パリ、ドローネー、レジェそしてピカビアがいたオルフィスムなどがあつた。

一方、1910年代までの未来派は、広報における多様なメディアの活用方法も編み出し、メンバーの作品も当時の世界では最も先進的なものであつた。その影響もあつてか、続くダダイズム、シュルレアリスムも同様の手法に用いながら、周辺の青年芸術家たちを巻き込み拡大化し、当時の欧米における既存の芸術に反旗を翻していったのである。

上記のように、20世紀初頭に次々と生まれたモダンアート・グループに共通するテーマは「19世紀までの伝統的アート」への反抗である。すなわち、伝統的アートとは写実主義や自然主義的なものを指し、一方モダンアートは人間の内面への探求、新しい造形意識が特徴的である。フォービズムにおいては、激しい色彩や原色を使い、色彩の持つ表現力を重視し、感覚に直接的に働きかける表現手段として色彩を用いた。キュビズムに関しては、対象を幾何学的に細分化し、その後で再構築するといったセザンヌから繋がる新しい造形意識で制作し、後世の絵画に大きな影響を与えた。

一方、未来派は、フランスの印象派、キュビズムの影響を大きく受けながら、ダダイズムとも共通する徹底的な伝統芸術の美学への抵抗、既成の価値観に対する全否定を謳った。

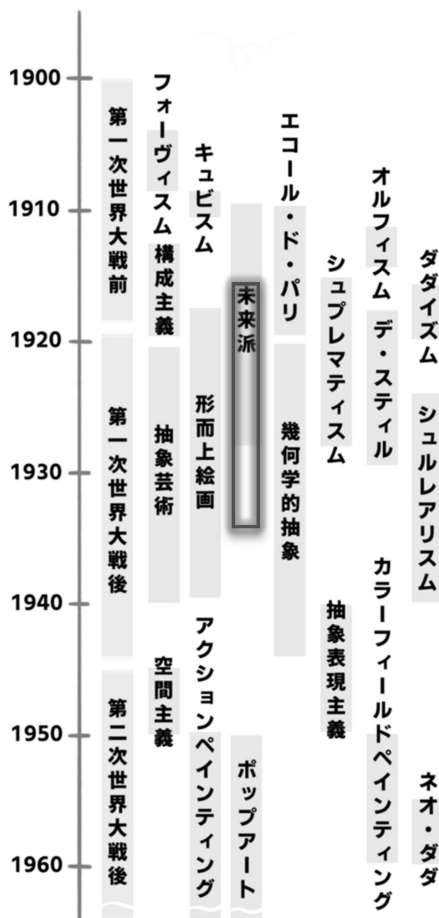


図4 1900年以降のモダンアート

特に前面に押し出したものは、20 世紀初頭における都市生活や工業社会におけるダイナミズム、すなわち機械美、スピード感であった。加えて、ベルグソン哲学、キュビズムの流れをくむ表現対象を様々な角度、観点から分析したときに現れる複数の局面の同時性を謳い、従来のヨーロッパ絵画における伝統的価値観でもある一点透視図法に対し、重大なるアンチテーゼを示した。その思想は後のダダイズム、シュルレアリスムの運動に受け継がれることになった。未来派そのものは、ボッチョーニの早逝、首領マリネッティの政治への接近などによって芸術運動の純粋性を薄めることになり、1915 年時点で実質的な運動を終えることになってしまったと言われる。

しかしながら、印象派から始まった近代芸術を受け継ぎ、絵画、彫刻、音楽、建築などジャンルを超え、総合芸術という概念を産み、さらにグループで示威運動を展開するといった新しい芸術運動をどのグループよりも先に実践し、後の芸術運動の模範モデルとなった未来派の先進性をいま一度再評価することが必要と考える。

## 図表

図 1 : [https://en.wikipedia.org/wiki/Futurism#/media/File:Russolo,\\_Carr%C3%A0,\\_Marinetti,\\_Boccioni\\_and\\_Severini\\_in\\_front\\_of\\_Le\\_Figaro,\\_Paris,\\_9\\_February\\_1912.jpg](https://en.wikipedia.org/wiki/Futurism#/media/File:Russolo,_Carr%C3%A0,_Marinetti,_Boccioni_and_Severini_in_front_of_Le_Figaro,_Paris,_9_February_1912.jpg)

1912 年 2 月 9 日 パリ、ル・フィガロ社前

左より：ルイジ・ルッソロ カルロ・カッラ F.T.マリネッティ ウンベルト・ボッチョーニ ジーノ・セヴェリーニ

図 2 : ボッチョーニ『空間における連続性の唯一の形態』1913 年制作 ミラノ 20 世紀美術館にて筆者撮影

図 3 : ボッチョーニ『空間における連続性の唯一の形態』の図柄が刻印されたイタリア 20 セントユーロ硬貨

## 引用文献・参考文献：

1. 山梨俊夫『現代絵画入門 二十世紀美術をどう読み解くか』中央公論社, 1999 年
2. 宮下誠『20 世紀絵画 モダニズム美術史を問い直す』光文社, 2005 年
3. 伊藤武『イタリア現代史』中央公論社, 2016 年
4. 田之倉稔『ファッションと文化』山川出版社, 2014 年
5. 香内信子『「未来派」と日本の詩人たち』グスコ出版, 2007 年
6. Caroline Tisdall & Angelo Bozzolla, *FUTURISM*, Oxford University Press, 1978
7. Sylvia Martin, *Futurism*, Taschen, 2005
8. エンリコ・クリスボルティ, 井関正昭 構成・監修『未来派 1909-1944』東京新聞, 1922
9. ジョルジュ・デ・マルキス『アヴァンギャルド芸術論』若桑みどり訳, 現代企画室, 1922 年
10. 井関正昭『私が愛したイタリアの美術』中央公論美術出版, 2006 年
11. 塚原史『アヴァンギャルドの時代 1910 年ー30 年代』未来社, 1997 年

12. 塚原史『言葉のアヴァンギャルド』講談社, 1994 年
13. 中山公男監修『ボッチョーニ』週刊グレート・アーティスト第 25 号, 同朋舎出版, 1990 年
14. フランコ・ルッソーリ監修『ボッチョーニ』ファブリ世界彫刻集 10, 平凡社, 1972 年

註:

- (1) フィリッポ・トンマーズ・マリネッティ (Filippo Tommaso Marinetti, 1876—1944) は、エジプトのアレキサンドリア生まれる。イタリアの詩人、作家、批評家、未来派の創始者。1909 年 2 月、パリの『フィガロ』紙に「未来派宣言」を発表、機械とスピードの美を唱え、伝統の破壊を主張、戦争を賛美し、1915 年よりムッソリーニ率いるファシズムに同調することになった。
- (2) 上記引用文献 8 p. 63
- (3) アンリ・ベルグソン (Henri Bergson, 1859—1941、フランスの哲学者。近代の自然科学的・機械的思考方法を克服、内的認識・哲学的直観の優位を説き、生命の流動性を重視する生の哲学を主張した。1927 年ノーベル文学賞受賞。著書には、『意識の直接与件に関する試論 (時間と自由)』(1889)、『物質と記憶』(1896)『創造的進化』(1907)、『道徳と宗教の二源泉』(1932)などがある。

なお、本研究は 2019 年度静岡産業大学情報学部の学内研究助成金による成果の一部である。